

神だの運だのを語って良いのは、 やれることを全部やった人間だけの特権



競技かるたの世界を舞台にした人気コミックを原作に、高校生たちがかるたに懸ける青春の情動をみずみずしく描いた実写映画「ちはやふる」。「上の句」「下の句」「結び」の3部作で上映された本作品は、まさに「ちはやふる（＝勢いの強いさま）」というタイトルのとおり、映画公開後、瞬く間に競技かるたの知名度向上と競技人口の増加に大きな影響を与えました。

本映画のプロデューサーとして、総勢200人を超える俳優陣とスタッフを現場で支えたのは、本市出身の巢立恭平さんです。

都城高校時代に所属していたバスケットボール部の恩師の勧めで、社会勉強として18歳で上京。知人のついでで右も左も分からないまま映像制作の業界に飛び込み、そこから約10年間の下積み時代に「踊る大捜査線」や「海猿」などの映画を制作部として担当。当時は、現場で叱責され悪戦苦闘する日々が続き、目標を見失い、現場から逃げ出したこともありました。そのたびに「お前がいないと、この作品は出来上がらない」と先

輩から諭され踏みとどまりましたが、「プロデューサーになりチームを意識して初めて、誰一人欠けても作品は完成しない、というこの言葉の本当の意味に気付いた」と当時を懐かしみながら優しい表情を浮かべます。

その後、短編映画のプロデューサーや現場の予算を管理するラインプロデューサーを経験。そして30代前半の時「世にも奇妙な物語」や「カノジョは嘘を愛しすぎて」などの作品でチームを組んだ小泉徳宏監督から声が掛かり、映画「ちはやふる」で劇場長編プロデューサーとしてデビューを果たしました。当時、監督も含め若いスタッフが多かった現場では、「みんなが意見を言いやすいアットホームな雰囲気作り」に努め、互いに支え合うファミリアのようなチームだった。このチームでなければ作れないフレッシュさあふれる作品が出来上がった」と振り返ります。

百人一首の短歌を織り交ぜながら、世代を問わず、多くの人の心に響くセリフが散りばめられた本作品。中でも巢立さんは、劇中で「青春全部懸けても勝てない」と弱音を吐く高

校生に対し、かるたの恩師が言うセリフ「神だの運だのを語って良いのは、やれることを全部やった人間だけの特権。懸けてから言いなさい」が印象的だと語ります。苦しい時代を耐え、トライアンドエラーを繰り返しながら挑戦を続けてきた巢立さんだからこそ、強く共感できる言葉だったのでしょう。

作品が公開されると、自身でも映画館を訪れ、上映後の観客の声にそっと耳をそばだてるという巢立さん。自分の携わった作品が誰かの心を動かし、勇気や希望を持つきっかけになっているのを感じられるのが、この仕事のやりがいというれしうに微笑みます。「何かに没頭したり、好きなことを楽しんだりしていれば、いつだってその時が、青春。失敗を怖がらず挑戦し、後悔のないよう全力を懸けて今を生きていることが大切」と力強く語りました。

株式会社ロボット所属
映画「ちはやふる」
プロデューサー

すだて 巢立 恭平さん
（都城市出身）

人の風景
Smiling faces of miyakonojo